

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年十一月度 入選句（投稿総数三千三百九十二句・一般投句数四百十六句）

特選

選者 大橋 庄一郎

垣根越し香りもらいし金木犀

滋賀県甲賀市

甲賀忍者

隣家より垣根越しに香り来る金木犀をよまれたもので、金木犀は中国原産のモクセイ科の常緑小高木で、高さ三米〜六米、葉は深緑色で鋸歯をもち、対生する。庭園木として秋に開花し、甘い芳香を放つ、香りの良い花と整った樹の形を愛でて、庭園に植えられる木で、良い香りを持つものを感謝してよまれたよい句です。

秋まつり村中嬉嬉と大太鼓

大垣市

中山 あや子

単に「祭」は夏の季語、「春祭」は豊作祈願のためのものだが、「秋祭」は、農耕の収穫を感謝する祭である。古くは旧暦十一月が最盛期だったが、明治の改暦後は十月に秋祭が集中になったが、秋まつりは村にとって大切な大事な行事で有り、子供さんから老人迄、古里の村に帰つて来た客人も混え、嬉嬉として喜び楽しみ大太鼓も打たれた様子をよくよまれた句で、中句の「村中嬉嬉と」が特によい。

お捨りの飛ぶ大見得の村芝居

愛知県名古屋市

岩田 遊泉

農村や郊外地区では秋の収穫後、祭礼などの余興で、芸達者な村人等が歌舞伎や狂言を演じていた。顔見知りの下手な素人芝居は、逆に親しみを呼び、地区の親睦交流におおいに役立つてゐる。役者の動作や感情の頂点に達したことを示すために一瞬停止して、特に目立つポーズをとる大見得の時、観衆の中からお捨と云つてお金等を役者に向けて投げ、舞台をおおいに盛上げる様子を上手によまれた楽しい句です。

秀逸

一町歩守る氣迫の案山子かな

愛知県名古屋市

舘野 茂子

冷えこみし夜空を走る流れ星

大垣市

棚橋 みさを

家々の消えぬ窓の灯秋深し

岐阜市

富永 萬里

合唱の声澄みわたる蛤塚忌

大垣市

佐竹 余史美

軽快な鉢の庭師冬隣

大垣市

不破 英雄

久しぶり村に嫁来る豊の秋

大垣市

鶴田 信子

鈴虫や泣きし軒下籠の中

京都府宇治市

上野 忠夫

大輪の菊に作者の名札あり

不破郡垂井町

久保田 紘義

おちやっぴいその笑顔良し七五三

岐阜市

野田 葉月

望郷の歌を唄へば秋の風

福岡県福岡市

大津 英世

入選

古文書の墨跡除けし紙魚の跡
夏の夕孫も手伝ふ畑に水
枯葉ちる古城の散策夢はせる
古ビルは更地になりて天高し
痛いつと吾が指口に栗ひろい
冬耕の人影長く日の傾ぎ
菊活けし白あざやかに床柱
薄もみじ行く程に濃く山城へ
朱に黄に緑交へて秋の山
美濃の秋二十一句碑巡りけり

愛知県額田郡 平松 京師
大垣市 日比 昌子
愛知県名古屋市 上野 美智子
安八郡安八町 渡辺 千代美
大垣市 多和田 一徳
大垣市 岡田 あや子
大垣市 坪井 克枝
大垣市 中西 映衣子
大垣市 安田 直隆
滋賀県野洲市 土井 妙子

入選

ひらり落つ波紋に流れゆく紅葉
家族づれ街にあふれし七五三
柿落葉掃く背中にも又落葉
柿かじる故郷の味母のあぢ
地獄絵の赤一色や秋彼岸
吊し柿いつもの場所に陣取りて
押し切りをもて新薬の匂ひかな
赤頬が赤みを探す林檎狩り
木犀の香りこぼして指に満つ
ふる里へ月がきれいと電話する

京都府宇治市 中村 広美
大垣市 神野 武彦
不破郡垂井町 大羽 志津子
大垣市 久保田 悟義
大垣市 澤井 国造
大垣市 高木 佐知子
愛知県豊田市 城山 憲三
加茂郡八百津町 新井 悠
揖斐郡揖斐川町 栗野 みねお
神奈川県川崎市 佐藤 廣枝

選者吟

掃けば散りまた掃けば散る銀杏並木

庄 一 郎